

国語教材としての評論文について —より良い読解指導のために—

坂 田 達 紀

評論文は、通常、論理性的の特立した「論理的文章」に分類される。それゆえ、国語科教育において、評論文を教材として扱う際の主な目標ないし目的は、論理的思考力の育成と考えられている。しかし、評論文にも様々なものがあり、中には論理性が特立しているとは言い難い評論文も存在する。そして、重要なことは、こうした論理的とは言い難い評論文も、少なからず国語教科書に収載されている、ということである。論理性が特立していないのであれば、これらの評論文を教材として扱う際には、論理的思考力の育成とは別の目標・目的のもとに指導する必要があるのではないか。本稿では、このような事情に鑑み、この種の評論文に該当する国語教科書収載の文章を具体的に分析・検討して、その特徴もしくは性質を析出するとともに、これらの評論文を国語教材とする際、如何なる目標や目的のもとに指導すべきかを考察した。具体的に分析・検討した文章は、いずれも高等学校の国語教科書に収載されている、小林秀雄の「無常ということ」と「平家物語」、それに、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」の三篇であるが、これらの評論文に共通する特徴・性質として、①「信ずるということ」を基底として書かれた、自らの真実が述べられた文章であり、かつ、②自らの感動を言葉で再現・定着した、芸術性のきわめて高い文章である、ということが明らかになった。そして、これら二つの特徴・性質を併せ持つ評論文は、一種の散文詩として読み味わうべきではないか、ということをも、小林および清岡自身の言葉を引いて指摘した。結論として、こうした種類の評論文を国語教材として扱う際には、論理的思考力の育成を図るよりも、芸術性の卓立した「文学的文章」を扱うときと同じ目標・目的のもとに指導すべきであることを述べた。

キーワード：国語教材としての評論文、論理性、芸術性、散文詩、読解指導の目標・目的

I

現在、中学校・高等学校の国語教科書には、多くの評論文が収載されている。文章表現の様式を「日常的文章」「論理的文章」「文学的文章」に三大別した場合、評論文は、通常、論理性的の特立した「論理的文章」に分類される¹⁾。それゆえ、国語科教育において評論文を扱う際の主な目標ないし目的は、その文章を読むことにより、筋道立ててものごとを考える力を育てること、すなわち、論理的思考力の育成と考えられている。こうした考え方は、ごく常識的なものであり、決して間違っているわけではない。たとえば、山本(2011)の次の指摘にも、この考え方が表れている。

評論教材指導の最大の意味は、論理的思考力の育成（無論、ひいては表現力等の伸長にも）にある。したがって、単に論旨・主張を読み取らせるだけでなく、論理性が何によって保証されているのかを、教材に即して具体的に分析・検証させていく作業が軸とならねばならない。（86頁）

2009年3月に改訂・告示された新しい高等学校学習指導要領では、現代文Bの指導事項に「ア 文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。」²⁾とある。その解説には、「ここで対象となる文章には、論理的な文章だけではなく、文学的な文章や実用的な文章も含まれる。」³⁾と述べられているが、こうした解説が付されること自体、「論理性を評価する」「対象となる文章」の中心が「論理的文章」であることを意味していよう。さらに、この指導事項の中の「論理性を評価する」については、次のように解説されている。

「論理性を評価する」の「論理」とは、考えの筋道の通し方である。それを「評価する」とは、文章の構成や展開の有り様や、それが、要旨などを伝えるために果たしている効果などを分析、考察し、その価値を判じることである。このことは、どのような文章を読む際にも重要なことであり、生徒の論理的な思考力の育成に直接役立つ⁴⁾。

つまりは、「論理的文章」としての評論文を教材にすることによって、生徒の論理的思考力を育成しよう、という考え方は、常識的であるばかりでなく、学習指導要領に適った考え方でもあるのである。

しかし、問題は、評論文にも様々なものがあり、中には論理性が特立しているとは言い難い評論文もある、ということである。論理的でない評論文、と言えは言い過ぎかも知れぬが、少なくとも、論理性とは異なる別の性質の方が卓立していると考えられる評論文も存在するのである。このような評論文は、当然のことながら、論理以外の「何か」により重きを置いて書かれていようが、それはいったい何であろうか。そして、さらに重要なことは、こうした論理的とは言い難い評論文も、少なからず国語教科書に収載されている、ということである。このような評論文を教材として扱う際には、論理的思考力の育成とは別の目標・目的のもとに指導する必要があるのではないか。本稿では、以上の事情に鑑み、この種の評論文に該当する文章を具体的に分析・検討して、その特徴もしくは性質を析出するとともに、これらの評論文を国語教材とする際、如何なる目標や目的のもとに指導すべきかを考察する。この試みは、国語教材としての評論文について、教育の現場で、よりきめの細かい指導を期するために必要不可欠なものと考えられる。

Ⅱ

論理性が特立しているとは言い難い、あるいは、論理性よりも別の性質の方が卓立していると考えられる評論文の典型的な事例としてまず挙げるべきは、小林秀雄の「無常ということ」

である。本章では、この文章の全文を引いて具体的かつ詳細に分析・検討することにより、その特徴ないし性質を明らかにする。なお、「無常ということ」は、これまでいわゆる定番教材として多くの国語教科書に採録されてきたし、現在も高等学校現代文の複数の教科書に収載されているが、以下の引用は、『精選 現代文 改訂版』（大修館書店、2008年）収載のものに拠る（352～357頁）。ただし、文番号は、説明の都合上、引用者が施したものである。

「無常ということ」全文

「01或るひといはく、比叡の御社に、いつはりて kannagi のまねしたるなま女房の、十禅師の御前にて、夜うち深け、人しづまりて後、ていとうていとうと、つづみをうちて、心すましたる声にて、とてもかくても候ふ、なうなうとうたひけり。02その心を人にしひ問はれていはく、生死無常の有様を思ふに、この世のことはとてもかくても候ふ。03なう後世をたすけ給へと申すなり、云々。」

04これは「一言芳談抄」の中にある文で、読んだ時、いい文章だと心に残ったのであるが、先日、比叡山に行き、山王権現の辺りの青葉やら石垣やらを眺めて、ほんやりとうろついていると、突然、この短文が、当時の絵巻物の残欠でも見るようなふうにな心に浮かび、文の節々が、まるで古びた絵の細勁な描線をたどるように心にしみわたった。05そんな経験は、初めてなので、ひどく心が動き、坂本でそばを食っている間も、あやしい思いがし続けた。06あの時、自分は何を感じ、何を考えていたのだろうか、今になってそれがしきりに気にかかる。07無論、取るに足らぬある幻覚が起こったにすぎまい。08そう考えて済ますのは便利であるが、どうもそういう便利な考えを信用する気になれないのは、どうしたものだろうか。09実は、何を書くのか判然しないままに書き始めているのである。

10「一言芳談抄」は、恐らく兼好の愛読書の一つだったのであるが、この文を「徒然草」のうちに置いても少しも遜色はない。11今はもう同じ文を目の前にして、そんなつまらぬことしか考えられないのである。12依然として一種の名文とは思われるが、あれほど自分を動かした美しさはどこに消えてしまったのか。13消えたのではなく現に目の前にあるのかもしれない。14それをつかむに適したこちらの心身のある状態だけが消え去って、取り戻す術を自分は知らないのかもしれない。15こんな子供らしい疑問が、既に僕を途方もない迷路に押しやる。16僕は押されるままに、別段反抗はしない。17そういう美学の萌芽とも呼ぶべき状態に、少しも疑わしい性質を見つけ出すことができないからである。18だが、僕は決して美学には行き着かない。

19確かに空想なぞしてはいなかった。20青葉が太陽に光るのやら、石垣の苔のつき具合やらを一心に見ていたのだし、鮮やかに浮かび上がった文章をはっきりたどった。21余計なことは何一つ考えなかったのである。22どのような自然の諸条件に、僕の精神のどのような性質が順応したのだろうか。23そんなことはわからない。24わからぬばかりではなく、そういう具合な考え方が既に一片の洒落にすぎないかもしれない。25僕は、ただある満ち足りた時間があつたことを思い出しているだけだ。26自分が生きている証拠だけが充満し、その一つ一つがはっきりとわかっているような時間が。27無論、今はうまく思い出してい

るわけではないのだが、あの時は、実に巧みに思い出していたのではなかったか。28何を。29鎌倉時代をか。30そうかもしれぬ。31そんな気もする。

32歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいう思想からはっきりと逃れるのが、以前にはたいへん難しく思えたものだ。33そういう思想は、一見魅力ある様々な手管めいたものを備えて、僕を襲ったから。34一方歴史というものは、見れば見るほど動かし難い形と映ってくるばかりであった。35新しい解釈なぞでびくともするものではない、そんなものにしてやられるような脆弱なものではない、そういうことをいよいよ合点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。36晩年の鷗外が考証家に堕したというような説は取るに足らぬ。37あの膨大な考証を始めるに至って、彼は恐らくやっと歴史の魂に推参したのである。38『古事記伝』を読んだ時も、同じようなものを感じた。39解釈を拒絶して動じないものだけが美しい、これが宣長の抱いたいいちばん強い思想だ。40解釈だらけの現代にはいちばん秘められた思想だ。41そんなことをある日考えた。42また、ある日、ある考えが突然浮かび、たまたまそばにいた川端康成さんにこんなふうにしやべったのを思い出す。43彼笑って答えなかったが。「44生きている人間などというものは、どうもしかたのない代物だな。45何を考えているのやら、何を言い出すのやら、しでかすのやら、自分のことにせよ他人事にせよ、わかったためしがあったのか。46鑑賞にも観察にも堪えない。47そこにいくと死んでしまった人間というものは大したものだ。48なぜ、ああはっきりとしっかりとしてくるんだろう。49まさに人間の形をしているよ。50してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな。」

51この一種の動物という考えは、かなり僕の気に入ったが、考えの糸は切れたままでいた。52歴史には死人だけしか現れてこない。53したがって、のっぴきならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ。54思い出となれば、みんな美しく見えるとよく言うが、その意味をみんなが間違えている。55僕らが過去を飾りがちなのではない。56過去のほうで、僕らに余計な思いをさせないだけなのである。57思い出が、僕らを一種の動物であることから救うのだ。58記憶するだけではいけないのだろう。59思い出さなくてはいけないのだろう。60多くの歴史家が、一種の動物にとどまるのは、頭を記憶でいっぱいにしてるので、心をむなしくして思い出することができないからではあるまいか。

61上手に思い出すことは非常に難しい。62だが、それが、過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想（僕にはそれは現代における最大の妄想と思われるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方のように思える。63成功の期はあるのだ。64この世は無常とは決して仏説というようなものではあるまい。65それはいついかなる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状态である。66現代人には、鎌倉時代のどこかのなま女房ほどにも、無常ということがわかっていない。67常なるものを見失ったからである。

この文章の特徴・性質を考えるうえで、まず着目すべきは、第09文「実は、何を書くのか判然しないままに書き始めているのである。」であろう。一般に、言語作品としての文章は、書き手の言いたいこと（意見・考え・主張）すなわち「主題」（テーマ）が、何らかの「構想」

のもとに「叙述」されたものとされる⁵⁾が、この第9文が意味しているのは、書き手である小林秀雄が、「主題」(テーマ) および「構想」を明確に認識することなく、「叙述」し始めた、ということである。「構想」は、文章の作成・執筆の過程では、「構成」と言い換えられるが、これは、要するに、文レベルの一つ一つの「叙述」に「文脈」(すじみち)をつけ、「結構」(くみたて)を整えることである⁶⁾。したがって、「構想」・「構成」についての明確な認識が無い文章は、論理的なものになろうはずが無い。況してや「主題」(テーマ)すら明確に認識できていないのであれば、尚更であろう。つまり、この第9文は、書き手である小林自身が、この文章を論理的に書いていない、と告白しているのに等しい、きわめて重要な一文なのである。

実際、「無常ということ」には、小林が断定的に意見・考え・主張を述べているものの、その根拠や理由が示されていないがゆえに、論理的とはいえない叙述が随所に見られる。たとえば、第18文「だが、僕は決して美学には行き着かない。」がそうである。なぜ小林が「決して美学には行き着かない」のか、読者には理解できない。むしろ、直前の第17文にあるように、「そういう美学の萌芽とも呼ぶべき状態に、少しも疑わしい性質を見つけ出すことができない」のであれば、論理的には「美学に行き着く」のではないだろうか。しかし、小林は、まったく逆のことを述べている。

また、第37文「あの膨大な考証を始めるに至って、彼は恐らくやっとな歴史の魂に推参したのである。」も、同じく論理的な叙述とはいえない。この文は、直前の第36文「晩年の鷗外が考証家に堕したというような説は取るに足らぬ。」によって強調されているが、なぜ「膨大な考証を始める」ことが、「歴史の魂に推参した」ことになるのであろうか。「考証」は実証的なものであるから、第60文に言うような「心をむなしくして思い出すこと」とは異なるであろう。むしろ、「考証」をすれば歴史についての知識が増え、同じ第60文で否定されている「頭を記憶でいっぱいにして」態度につながるのではないか。加えて、「歴史の魂に推参した」という表現が比喩表現であることも、この第37文を一層理解しにくくしている。

さらにまた、第57文「思い出が、僕らを一種の動物であることから救うのだ。」や第62文「だが、それが、過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想(僕にはそれは現代における最大の妄想と思われるが)から逃れる唯一の本当に有効なやり方のように思える。」、そして、この文章のテーマ・センテンスとも言うべき第65文「それはいついかなる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状态である。」なども、同様に論理的な叙述とはいえない。これらの叙述は皆、先の第18文・第37文も含めて、筋道を踏んで自分の考えを読者に分かり易く述べたものではなく、自分の固く信ずるところ、すなわち、己の信条の唐突な表明と言うべきものである。結局、「無常ということ」は、小林が、「途方もない迷路に押しや」(第15文)られたり、「ある日、ある考えが突然浮か」(第42文)んだかと思えば、その「考えの糸は切れたまままでいた」(第51文)りしながら書いた、個人的な信条表明の文章なのであって、いわゆる「論理的文章」の範疇にある、論理性の特立した評論文ではない、ということである。

しかし、このことは、「無常ということ」が国語教材として不適当である、ということを保ずしも意味していない。たしかに、この文章の読解を通して学習者の論理的思考力の育成を図るには無理がある。けれども、論理的思考力と同等かそれ以上に重要なことを学ばせることが

できるのではないか。それは、論理的に正しいことでも信ずるとは限らず、逆に、論理的に説明できないことでも信ずるのが人間だ、ということである。たとえば、「無常ということ」の冒頭に引用された「一言芳談抄」の一節には、死後の安寧を神に祈る「なま女房」が登場しているが、そもそも神仏や死後の世界の存在などは、論理的に説明することも証明することもできないものである。だが、これを信ずる人には確実に存在するのであり、この「なま女房」や、その祈る姿に感動を覚えた小林にとっては、当り前の存在なのである。このように、「無常ということ」には、書き手である小林秀雄の信ずるところが述べられているのであるから、その文章が論理性を欠いていることは、偶然の結果ではなく、むしろ必然と言うべきであろう。さらに言えば、小林は、意図的にこのような論理的でない書き方をしている、と言っても過言ではない。つまり、「無常ということ」では、「便利な考え」（第08文）や「美学」（第17文・第18文）、「そういう具合な考え方」（第24文）、「歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいう思想」（第32文）そして「過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想」（第62文）などが、小林がその重要性を強く主張する「心をむなしくして思い出すこと」（第60文）・「上手に思い出すこと」（第61文）と対置され、「信用する気になれない」（第08文）、「一片の洒落にすぎない」（第24文）、「現代における最大の妄想」（第62文）などと、悉く否定的に扱われているが、これらの否定的な扱いがなされた「考え」や「美学」や「思想」は、すべて論理的なものである。小林は、「解釈だらけの現代」（第40文）においては、こうした「考え」・「美学」・「思想」といった論理的なものの考え方がかりが重視されていることに対して、いわば強烈なアンチテーゼを、「無常ということ」を意図して非論理的に書くことによって突き付けていると考えられるのである。

ここで、付け加えて指摘しておくならば、文章の論理性のみならず論理そのものにもそれほど重きを置かない、という小林の考えは、彼が若年の頃から晩年に至るまで一貫して持ち続けた、根本的な思想とも言うべきものである。小林は、文壇にデビューした1929年、「志賀直哉」において、「論理を尊敬するといふ事は、論理を軽蔑すると等しく無意味なわざなのである。」⁷⁾と述べ、翌年には「アシルと亀の子 IV」（原題「アシルと亀の子」）の中で、「一体論文といふものが、論理的に正しいか正しくないかといふ事は、それほどの大事ではない、その議論が人を動かすか動かさないかが、常に遙かに困難な重要な問題なのだ。」⁸⁾と述べている。つまり、小林は、論理を蔑ろにしたとまでは言えないにしても、少なくとも、論理よりも「人を動かすか動かさないか」ということに重きを置いて文章を書いたのである。「人を動かすか動かさないか」ということは、説得力の有無と言い換えられようが、文壇デビューから約30年の歳月を経た1960年、「無私の精神」（原題「無私の精神―批評の客観性について」）でも、同じ主旨のことを次のように述べている。

批評の方法は、この対象の性質に直接に規定されてゐるのであり、従つて、その方法は、理論的といふより寧ろ実践的なものでなければならない。批評の目的は証明にはない、説得にある。だが、説得するに足るだけの証明があればよい、と言ふだけでは足らぬ。証明が過ぎれば、説得力を欠く恐れがあるといふところに、批評方法の特色があるとさへ言へ

るのだ⁹⁾。

小林が、論理的かどうかということよりも説得力を重視して文章を書いたことは、もはや明白であろう。文章が論理的に過ぎれば、むしろ説得力を欠いてしまう、と小林は一貫して考えていたのである。このことが、小林が意図的に論理的な文章を書かなかった最大の原因と考えられる。そして、一方で、文章の説得力を担保するものとしては、「心理的な要素」というものを考えていた。次に引用するのは、文壇デビューからほぼ10年が経ち、すでに文芸評論家として確固たる地位を築いた小林が、文章についての自らの考えや態度を明かした、きわめて貴重な資料「文章について」（原題「現代文章論(一)」、1940年）の一節である。

ある評論の理論が整然としてゐるとか、論証が精緻だとかいふ様な事は、これは注意力の問題で、大した難題でもない。平たく言へば、頭さへよければいゝのであるが、文章の良い悪いの問題になると、頭の良い悪いといふ様な事では片付かない。つまり良い文章を書く条件は、そんな簡単なものではない。或る評論が、論証に精しいといふ事は結構な事だが、精しい論証が必ずしも読者を説得するとは限らない。頭脳は明晰だが一向感化力も説得力もないといふ人間が世間にはゐる様に、そんな人間をそつくり思はせる様な評論もあるので、さういふ評論を書いて事が足りてゐる限り、文章に関する本質的な問題は起り得ないであらう。

論証は精しいが説得力が貧しいといふ評論の性質をもう少し考へてみると、さういふ評論は論理的な要素は十分に備へ乍ら、心理的な要素に欠ける処があるのだ、といふ事になる。ある評論を読んで理窟は成る程さうだが、何か得心の行かぬ感じを読者が受けるのは、その評論に現れた理論が心理的な裏打ちを欠いてゐる点を敏感に感じ取るが為である。

理論上の細かい分析などは、評論を書き慣れた人には、さういふものに慣れない読者が考へる程面倒なものではない。評論家がほんたうに困難を覚える処は、たゞ理論の厳正を期するといふ事から一步を進め、理論が読者の心理にどういふ効果を与へるか、その効果も併せ計つて、評論の文章がたゞ理路の通つた文章に止まらず、魅力ある生きた文章たることを期するといふ点にある。なかなか力及ばず其処まで行けないものだが、さういふ覚悟で評論を書かないと何時まで経つても評論に精彩が出ないのである¹⁰⁾。

この引用箇所には、評論が「良い文章」・「魅力ある生きた文章」になるための必須の条件は「心理的な要素」が備わっていることであり、「論理的な要素」は単に必要な条件程度のものではない、という小林の根本的な考えが明確に述べられている。では、その「心理的な要素」とは具体的には何であるのか、ということが次の重要な問題になるが、筆者は、拙稿（2007）において、この問題を分析・考察し、「信ずるということ」がその最たるものであるとの結論を得た。ここでは、詳しい説明は繰り返さないが、小林がこの「信ずるということ」を如何に重要視していたかが端的に述べられた、彼自身の言葉を引用しておく¹¹⁾。

信ずるということは、諸君が諸君流に信ずることです。知るということは、万人の如く知ることです。人間にはこの二つの道があるのです。知るということは、いつでも学問的に知ることです。僕は知っても、諸君は知らない、そんな知り方をしてはいけない。しかし、信ずるのは僕が信ずるのであって、諸君の信ずるところとは違うのです。

信ずるということは、責任をとることです。僕は間違っって信ずるかも知れませんよ。万人の如く考えないのだから。僕は僕流に考えるんですから、勿論間違っすることもあります。しかし、責任は取ります。それが信ずることなのです。信ずるという力を失うと、人間は責任を取らなくなるのです。

小林は、要するに、人間の認識のしかたには、「信ずるということ」と「知るということ」の二つがあると考えていた。「信ずるということ」は、「諸君が諸君流に」「僕は僕流に」信ずることであるから、これはものごとの真実性に関与する。他方、「知るということ」は、「万人の如く」「いつでも学問的に」知ることであるから、こちらはものごとの真理性に関与する。真理は論理的なものでなければならないが、真実は論理を超えたものである。先に、「無常ということ」が、小林の個人的な信条表明の文章であり、論理性の特立した評論文ではない、ということを描したたが、これは言い換えれば、「信ずるということ」を基底として書かれた、小林の真実が述べられた文章だということである。あるいは、また別の言い方をすれば、「知るということ」すなわち論理的な考え方ばかりが跋扈蔓延している近現代に対する反措定として書かれた文章とも言えよう。いずれにしても、「無常ということ」を国語教材として扱う際に重要なことは、以上のような非論理的どころか反論理的とも言える文章の特徴・性質を捉えさせることである。もちろん、書き手である小林秀雄の真実に虚心に耳を傾けさせることが重要であるのは言うまでもない。「無常ということ」のような評論文教材を指導する目標・目的は、論理的思考力の育成とは別のところにあるのである。

Ⅲ

ここでは、Ⅱに引き続いて、評論文「無常ということ」の特徴・性質を、また別の観点から具体的に分析するとともに、そうして析出された特徴・性質が、Ⅱで析出した特徴・性質を含めて、「無常ということ」に固有の特殊なものなのかどうか、つまり、「無常ということ」が例外的な評論文なのかどうかを検討する。

「無常ということ」は、「一言芳談抄」の一節を引用することから書き始められている（第01文～第03文）。そして、それに続く第二段落では、この「一言芳談抄」の一節についての自らの美的な感動の経験が描写（記述）されている。それは、「心に残った」（第04文）、「心に浮かび」（同）、「心にしみわたった」（同）、「ひどく心が動き」（第05文）、「あやしい思いがし続けた」（同）という具合である。ここから「無常ということ」の文章は展開していくのだが、実は、このことが重要で、つまり、自らの美的な感動の経験が、この文章を書く動機になっているのである。

逆に言えば、このような感動の経験が無ければ、「無常ということ」は書かれなかった、と言っても過言ではないのである。小林は、1959年、NHKで放送された中村光夫との対談「文化の根底を探る」の中で、自分が告白者であること、自分を告白することが根本の態度であること、そして、経験から発想を得て、感動からものを書く、ということを述べている¹²⁾が、この発言は、「無常ということ」の書き方に見事に合致している。その意味では、「無常ということ」は、小林の書いた文章の典型的な事例と言い得るのである。

また、小林は、1976年、或るインタビューに答えて、次のように発言している。

分析してる間は論理なんです。そこへ感情が入って来ないんです。勿論、感情だけじゃ書けませんから、論文でものはどうしても論理的な形式をとらなきゃならないんだけど、そういう分析的な論理じゃどうしても言い表せないものが、まずなきゃ、批評の文章はできないわけですよ。僕がそれに気づいたのは後になってからですけども、初めっからそういうものはあったですね。まず感動がなきゃ、僕の批評はなかったですよ¹³⁾。

この発言は、特定の文章を念頭に置いたものではないが、当然、「無常ということ」にも当てはまろう。小林が、論理よりも感動に重きを置いて「無常ということ」を書いたことは、もはや疑う余地が無い。小林は、「一言芳談抄」の一節から受けた感動の経験を、何とか言葉で言い表そうとする。先に指摘した、自らの美的な感動の経験が描写（記述）された第04文と第05文がそうであるし、この経験を後から振り返って述べた「あれほど自分を動かした美しさ」（第12文）、「ただある満ち足りた時間」（第25文）、「自分が生きている証拠だけが充満し、その一つ一つがはっきりとわかっているような時間」（第26文）などの表現もそうである。小林は、歌（あるいは詩）を、「強いが不安定な感動を、言葉を使つて整へて、安定した動かぬ姿にした」¹⁴⁾ものと考えていたが、これらの表現は、正に「強いが不安定な感動を、言葉を使つて整へて、安定した動かぬ姿にした」ものであり、その意味では、詩ないし詩的表現と行うことができる。この「無常ということ」を書いた1942年当時、小林は、いわゆる創造的批評を実践していた。創造的批評とは、彼自身の言葉で言えば、「詩でも書くような批評」である。小林は、1946年、或る座談会で、次のように述べている。

真っ白な原稿用紙を拡げて、何を書くか分らないで、詩でも書くような批評も書けぬものか。例えば、バッハがボンと一つ音を打つでしょう。その音の共鳴性を辿って、そこにフーガという形が出来上る。あんな風な批評文も書けないものかねえ。即興というものは一番やさしいが、又一番難かしい。文章が死んでいるのは既に解っていることを紙に写すからだ。解らないことが紙の上で解って来るような文章が書ければ、文章は生きて来るんじゃないだろうか。批評家は、文章は、思想なり意見なりを伝える手段に過ぎないという甘い考え方から容易に逃れられないのだ。批評だって芸術なのだ。そこに美がなくてはならぬ。そろばんを弾くように書いた批評文など、もう沢山だ。退屈で退屈でやり切れぬ¹⁵⁾。

この発言に明らかなように、小林は当時、内に美を孕んだ芸術としての批評、「詩でも書くような批評」を意識的に書こうとしていたのである。もちろん、そうした批評の一篇として「無常ということ」が書かれたことは言うまでもない。それは、「うまい分析とうまい結論」¹⁶⁾が論理的に構成・叙述されただけの「そろばんを弾くように書いた批評文」などとはまったく異なるものであり、中村光夫が「氏は本質において詩人なので、評論は氏にとって詩の代用品なのです」¹⁷⁾と指摘するように、一種の散文詩として読み味わうべき評論文なのである。なぜなら、繰り返しになるが、「無常ということ」には、比叡山・山王権現の辺りで突然「一言芳談抄」の一節を思い出した際の感動の経験が、言葉によってその姿を整えられ、再現・定着されているからである。そうした意味では、「無常ということ」は、論理性の特立した「論理的文章」にではなく、芸術性の卓立した「文学的文章」に分類されるべきなのではなかろうか。

さらにまた、「無常ということ」の詩的な性格すなわち芸術性は、多用された比喻表現によって、一層強められている。たとえば、「当時の絵巻物の残欠でも見るようなふう」に（第04文）、「まるで古びた絵の細勁な描線をたどるように」（同）、「歴史の魂に推参した」（第37文）、そして、「過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想」（第62文）等々の比喻表現である。吉本隆明が夙に指摘したところによれば、比喻は表現の自己表出性を高め、自己表出性は言語の価値に関わる¹⁸⁾。したがって、自己表出性が高められれば、それだけ表現の価値が高まり、つまりは、芸術性が高まることになると考えられるのである。「無常ということ」においては、上記のような比喻表現によって、その芸術性が高められていることも、付け加えて指摘しておきたい。

以上のように、「無常ということ」は、自らの感動を言葉で再現・定着した、芸術性のきわめて高い文章と言えるのだが、このことがすなわち、「無常ということ」の二番目の特徴・性質である。では、Ⅱで指摘した、「信ずるということ」を基底として書かれた、自らの真実が述べられた文章という、一番目の特徴・性質と、この二番目の特徴・性質とを併せ持つ「無常ということ」は、特殊で例外的な評論文なのであろうか。以下で検討する。

高等学校の国語教科書には、小林秀雄の書いた別の評論文も収載されている。「無常ということ」と同じく1942年に書かれた「平家物語」もその一つである¹⁹⁾。

「先がけの勲功立てずば生きてあらじと誓へる心生食知るも」これは、『平家物語』を詠じた子規の歌である。名歌ではないかもしれないが、子規の心が、『平家物語』の美しさの急所に鋭敏に動いたさまが感じられ、詩人がどれくらいよく詩人を知るか、その見本のような歌と思われておもしろい。

これは、小林の「平家物語」の冒頭段落である。引用から文章を始める書き方は、「無常ということ」のそれと同じであるが、重要なことは、引用から文章を書き始めるという形式そのものではなく、やはり、美的な感動の経験が、この文章を書く動機になっている、ということである。それは、「感じられ」や「おもしろい」という表現にも表われていようが、これらは、「子規の歌」に対するものである。それよりも、『平家物語』の美しさ」という言葉に着目すべき

であろう。つまり、「『平家物語』の美しさ」に対する感動の経験が、小林にこの文章を書かせていると考えられるのである。

小林の『平家物語』に対する感動は、第二段落以降を読み進めるにつれて、より一層明瞭になる。第二段落は、「『平家』の中の合戦の文章はみないが、宇治川先陣は、好きな文の一つだ。『盛衰記』でもあのあたりは優れたところだが、とても『平家』の簡潔な、底光りがしているような美しさには及ばぬ。」で始まり、次のように終わる。

まるで心理が写されているというより、隆々たる筋肉の動きが写されているような感じがする。事実、そうにちがいないのである。このあたりの文章からは、太陽の光と人間と馬の汗とが感じられる、そんなものは少しも書いてないが。

こうした叙述は、小林が「『平家物語』の美しさ」から受けた感動を、言葉で再現・定着した表現と考えられよう。したがって、「平家物語」も、先に「無常ということ」について指摘した二番目の特徴・性質を具えていると言えるのである。もちろん、感動を言葉で再現・定着した表現は、他にも存在する。第五段落冒頭の二文と、第六段落冒頭の四文を、次に引用しておく。

終わりのほうも実にいい。勇気と意志、健康と無邪気とが光り輝く。

こみあげてくるわだかまりのない哄笑が激戦の合図だ。これが『平家』という大音楽の精髓である。『平家』の人々はよく笑い、よく泣く。僕らは、彼ら自然児たちの強靱な声帯を感じるように、彼らの涙がどんなに塩辛いかも理解する。

ここまでこの文章を読み進めてくれば、小林が『平家物語』に如何に感動しているか、その大きさ・強さが十分に理解できよう。小林は、『平家物語』を「大音楽」に喩え、あるいは、「彼ら自然児たちの強靱な声帯を感じるように」といった比喩を駆使して、自らの感動を言葉で再現・定着しているのである。小林の「平家物語」が、「無常ということ」と同様、芸術性の卓立した「詩でも書くような批評」であることは、すでに明らかであろうが、最後に、最終段落（第七段落）の全文を引用しておきたい。ここには、やはり感動が再現・定着されているとともに、小林の信ずるところが断定的に叙述されている。

『平家』のあの冒頭の今様風の哀調が、多くの人々を誤らせた。『平家』の作者の思想なり人生観なりが、そこにあると信じ込んだがためである。いちおう、それはそうにちがいないけれども、なにも『平家』の思想はかくかくのものと子細らしく取り上げてみるほど、『平家』の作者は優れた思想家ではないということが肝心なので、彼はただ当時の知識人として月並みな口をきいていたにすぎない。物語の中でのただ一人の思想家重盛にしてからが、その説くところ、ほとんど矛盾撞着して不徹底な愚にもつかぬものであり、それが、

作者から同情の念をもって描かれているらしいところから推しても、分かるのである。作者を、本当に動かし導いたものは、彼のよく知っていた当時の思想というようなものではなく、彼自らはっきり知らなかった叙事詩人の伝統的な魂であった。彼自ら知らぬところに、彼が本当によく知り、よく信じた詩魂が動いていたのであって、『平家』が多くの作者たちの手により、あるいは読者らの手によって合作され、しかも誤らなかったゆえんもそこにある。『平家』の真正な原本を求める学者の努力はけっこうだが、俗本を駆逐しえたとする自負なぞつまらぬことである。流布本には、いわゆる原本なるものにあるよりも美しい叙述がしばしば現れる。『平家』の哀調、惑わしい言葉だ。このシンフォニーは短調で書かれていると言ったほうがいいのである。一種の哀調は、この作の叙事詩としての驚くべき純粋さからくるのであって、仏教思想というようなものからくるのではない。『平家』の作者たちの厭人も厭世もない詩魂から見れば、当時の無常の思想のごときは、時代のはかない意匠にすぎぬ。鎌倉の文化も風俗も手玉に取られ、人々はそのころの風俗のままに諸元素のような変わらぬ強いあるものに還元され、自然のうちに織り込まれ、僕らを差し招き、真実な回想とはどういうものかを教えている。

この最終段落では、ここに至るまでに小林が繰り返し言葉で表現しようとした『平家物語』に対する美的な感動の経験が、「このシンフォニーは短調で書かれている」や「叙事詩としての驚くべき純粋さ」という表現へと収斂し、最終的には、「鎌倉の文化も風俗も手玉に取られ、人々はそのころの風俗のままに諸元素のような変わらぬ強いあるものに還元され、自然のうちに織り込まれ、僕らを差し招き、真実な回想とはどういうものかを教えている。」という叙述で再現・定着されて締め括られている。と同時に、この段落で述べられている小林の主張や判断は、論理的な説明も証明もなされていない謂わば独断であり、その意味で、自らの信ずるところが断定的な叙述で表明されていると考えられる。たとえば、最も分りやすい例を挙げると、「作者を、本当に動かし導いたものは、彼のよく知っていた当時の思想というようなものではなく、彼自らはっきり知らなかった叙事詩人の伝統的な魂であった。彼自ら知らぬところに、彼が本当によく知り、よく信じた詩魂が動いていたのであって、『平家』が多くの作者たちの手により、あるいは読者らの手によって合作され、しかも誤らなかったゆえんもそこにある。」という叙述などは、論理的に説明することも証明することもできない事柄を述べており、小林がそう信じていればこそその叙述である。と言うのも、「叙事詩人の伝統的な魂」や「詩魂」は、それを信ずる人にしか存在しないものだからである。また、「『平家』の真正な原本を求める学者の努力はけっこうだが、俗本を駆逐しえたとする自負なぞつまらぬことである。」という叙述には、小林が学問的な考え方、すなわち、論理的・実証的な考え方を重視していない、ということが読み取れよう。これは、「無常ということ」において、「だが、僕は決して美学には行き着かない。」と述べたことと共通する、小林の根本的な態度・姿勢であったと考えられる。

以上、評論文「平家物語」も、「無常ということ」と同じく、「信ずること」を基底として書かれた、自らの真実が述べられた文章であり、かつ、自らの感動を言葉で再現・定着した、芸術性のきわめて高い文章であると言える。だが、このことは、考えてみれば当然のこと

である。なぜなら、同じ筆者が同じ時期に書いた評論文だからである。したがって、次に検討すべきは、他の筆者が書いた評論文にも、これら二つの特徴・性質が見られるかどうか、ということである。以下で検討するが、結論を先に述べるならば、これら二つの特徴・性質を具えた他の筆者の評論文は存在する。清岡卓行の「ミロのヴィーナス」がそうである。

「ミロのヴィーナス」は、1966年に刊行された清岡の評論集『手の変幻』（美術出版社）の序章をなす文章である。高等学校の国語教科書のいわゆる定番教材として、多くの教科書に収載されている。教科書によっては、タイトルを「手の変幻」や「失われた両腕」としているものもあるが、文章は、読点の有無や、一部の表記が漢字で書かれているか平仮名で書かれているか、といった細かな相違を除いて、基本的に同一である。「手の変幻」は評論集のタイトルであり、「ミロのヴィーナス」は「失われた両腕」と題されたこの文章のサブタイトルであるから、本来は、タイトルを「失われた両腕」とすべきであろうが、この問題はここでは扱措く。問題にすべきは、この文章もまた、感動を動機として書かれ、感動が言葉によって再現・定着されている、ということである。次に引用するのは、全七段落のうちの第三段落全文である²⁰⁾。

　　ぼくはここで、逆説を弄しようとしているのではない。これはぼくの実感なのだ。ミロのヴィーナスは、言うまでもなく、高雅と豊満の驚くべき合致を示しているところの、いわば美というものの一つの典型であり、その顔にしろ、その胸から腹にかけてのうねりにしろ、あるいはその背中の広がりししろ、どこを見つめていても、ほとんど飽きさせることのない均整の魔がそこにはたたえられている。しかも、それらに比較して、ふと気づくならば、失われた両腕はあるとらえがたい神秘的な雰囲気、いわば生命の多様な可能性の夢を深々とたたえている。つまり、そこでは、大理石でできた二本の美しい腕が失われた代わりに、存在すべき無数の美しい腕への暗示という、ふしぎに心象的な表現が思いがけなくもたらされたのである。それは、たしかに、半ばは偶然の生み出したものだろうが、なんという微妙な全体性への羽ばたきであることだろうか。その雰囲気に一度でも引きずり込まれたことがある人間は、そこに具体的な二本の腕が復活することを、ひそかに恐れるに違いない。たとえ、それがどんなにみごとな二本の腕であるとしても。

この段落には、清岡がこの文章で述べていることが「実感」であること、そして、清岡自身、ミロのヴィーナスの美しさに「引きずり込まれた」ということが、明確に述べられている。さらに、清岡がミロのヴィーナスの如何なるところに感動しているのか、その感動の中身が、ミロのヴィーナスの美しさを描写（記述）することを通して語られている。それは、現に存在するミロのヴィーナスについては、「高雅と豊満の驚くべき合致を示しているところの、いわば美というものの一つの典型」や「ほとんど飽きさせることのない均整の魔」などという表現であり、また、「失われた両腕」については、「あるとらえがたい神秘的な雰囲気、いわば生命の多様な可能性の夢を深々とたたえている」や「存在すべき無数の美しい腕への暗示という、ふしぎに心象的な表現」、そして、「微妙な全体性への羽ばたき」といった具合である。したがって、清岡も、小林と同様、自らの美的な感動の経験を、言葉によって再現・定着している、と

言えるのではなからうか。この段落に続く第四段落では、直截に「感動」という言葉を用いて、それが不変不動の確然たるものであることを述べている。次のとおりである。

したがって、ぼくにとっては、ミロのヴィーナスの失われた両腕の復元案というものが、すべて興ざめたもの、滑稽でグロテスクなものに思われてしかたがない。もちろん、そこには、失われた原形というものが客観的に推定されるはずであるから、すべての復元のための試みは正当であり、ぼくの困惑はかつてなものだろう。しかし、失われていることにひとたび心から感動した場合、もはや、それ以前の失われていない昔に感動することはほとんどできないのである。なぜなら、ここで問題となっていることは、表現における量の変化ではなくて、質の変化であるからだ。表現の次元そのものが既に異なってしまっている時、対象への愛と呼んでもいい感動が、どうして他の対象へさかのぼったりすることができるだろうか？ 一方にあるのは、おびただしい夢をはらんでいる無であり、もう一方にあるのは、たとえそれがどんなにすばらしいものであろうとも、限定されてあるところのなんらかの有である。

これは、第四段落全文であるが、ここでは、清岡が「ミロのヴィーナスの失われた両腕の復元案」を否定する理由が、一見論理的に述べられているようである。しかし、論理的であるかに見えるその理由の前提には、飽くまでもミロのヴィーナスへの感動が存在するのである。つまり、ミロのヴィーナスへの「心から感動」、「愛と呼んでもいい感動」があればこそ、「ミロのヴィーナスの失われた両腕の復元案」が如何に「客観的」で「正当」なものであろうとも、「すべて興ざめたもの、滑稽でグロテスクなものに思われてしかたがない」のであり、「感動することはほとんどできない」と言うのである。自らの感動を前提としている以上、「復元案」を否定する理由は、論理的なものにはなり得ない。なぜなら、清岡の感動に共感できない人（読み手）にとっては、「復元案」が「客観的」で「正当」なものであれば、それに賛成することの方がむしろ道理に適った考え方だからである。したがって、この段落は、「復元案」を否定する理由を論理的に説明した段落と言うよりも、清岡の感動の大きさ・強さを強調した段落と捉えるべきであろう。なお、付言すれば、「おびただしい夢をはらんでいる無」という表現は、やはり、清岡が自らの感動を言葉で再現・定着したものである。

次の第五段落では、「復元案」が繰り返し否定される。それは、自らの感動を前提にしたものであることに変わりはないが、それに加えて、清岡の信念とも言うべき、きわめて強い思いが伴っている。以下に全文を引用する。

例えば、彼女の左手はりんごを手のひらの上に載せていたかもしれない。そして、人柱像に支えられていたかもしれない。あるいは、楯を持っていたらどうか？ それとも、笏を？ いや、そうした場合はまったく異なって、入浴前か入浴後のなんらかの羞恥の姿態を示すものであるのかもしれない。さらには、こういうふうにも考えられる、実は彼女は単身像ではなくて、群像の一つであり、その左手は恋人の肩の上にでも置かれていたの

ではないか、と。——復元案は、実証的に、また想像的に、さまざまに試みられているようである。ぼくは、そうした関係の書物を読み、その中の説明図を眺めたりしながら、おそろしくむなしい気持ちにおそわれるのだ。選ばれたどんなイメージも、既に述べたように、失われていること以上の美しさを生み出すことができないのである。もし真の原形が発見され、そのことが疑いようもなくぼくに納得されたとしたら、ぼくは一種の怒りをもって、その真の原形を否認したいと思うだろう、まさに、芸術というものの名において。

この段落の前半は、ミロのヴィーナスの原形について、こうであったかも知れない、という様々な可能性を述べているに過ぎない。謂わば清岡の勝手な想像である。重要なのは、ダッシュ（——）以降の後半、とりわけ、最後の一文であろう。通常、「もし真の原形が発見され、そのことが疑いようもなくぼくに納得されたとしたら」、その「真の原形」をそれとして認めるのではなかろうか。あるいは、認めざるを得ないのではなかろうか。それが常識的で、また、論理的な考え方というものである。しかし、清岡は、飽くまでも両腕を失ったミロのヴィーナスの美しさに拘り、そこから受けた感動に固執して、「ぼくは一種の怒りをもって、その真の原形を否認したいと思うだろう、まさに、芸術というものの名において」と言うのである。ここには、常識や論理を超えた、清岡の強く信ずるところ、すなわち、芸術家としての信条が述べられていると言えよう。このように、評論文「ミロのヴィーナス」もまた、小林の書いた評論文と同様に、「信ずるということ」を基底として書かれた、清岡の真実が述べられた文章と考えられるのである。もちろん、この文章も、論理性の特立した「論理的文章」に分類すべきでないことは当然である。むしろ、非論理的な文章、あるいは、このような言い方が許されるならば、超論理的な文章と言うべきである。そして、この文章では、最後まで、繰り返し自らの感動を言葉で再現・定着しようとしている、ということも確認しておかなければならない。第六段落では、「生命の変幻自在な輝き」と述べ、最終の第七段落の最後は、次のように締め括られている。

そして、例えばこれらのことばに対して、美術品であるという運命を担ったミロのヴィーナスの失われた両腕は、ふしぎなアイロニーを呈示するのだ。ほかならぬその欠落によって、逆に、可能なあらゆる手への夢を奏でるのである。

ここまで清岡は、ミロのヴィーナスの美しさとそこから受けた感動とを様々な言葉で再現・定着してきたが、最終的に、「可能なあらゆる手への夢を奏でる」という表現に収束させている。これは、第三段落の「いわば生命の多様な可能性の夢を深々とたたえている」という表現と対応した表現でもあり、また、先に述べたように、この文章が収められた評論集のタイトル「手の変幻」とも照応しており、この文章全体を通して清岡の最も述べたかったことが込められた、重要な表現と考えられる。しかも、「失われた両腕は、…呈示する…奏でる」という一種の比喩が用いられており、その意味でもこの最後の二文（とりわけ最後の一文）は、芸術家・詩人としての清岡の思いの丈が込められた、高度に詩的な表現と言えるのではないだろうか。

清岡は、この文章が教科書に収載されるに際して、『『失われた両腕』について 現場のみなさんへ』という文章を書いているが、その最後の箇所ですべて述べている。

筆者は「失われた両腕」を書いたとき、それを『手の変幻』の序章であることからはずし、独立した文章、できれば一篇の散文詩として、詩の雑誌に発表してみたいという誘惑を感じました。それはたぶん、この短い文章において、人間の手の神秘性が、漠然とした形においてではありますが、未分化の状態で、最も強く意識されたためだと思います。

それで、「失われた両腕」が教科書の一部となるために、『手の変幻』からぼつんと抜かれるということは、筆者にとって、その未分化の詩的燃焼を自立させたくもあったという以前の夢を、思いがけない形で実現してくれるものです²¹⁾。

ここで、この文章の筆者である清岡が、「一篇の散文詩」と述べていることはきわめて重要である。先に小林が「詩でも書くような批評」を書こうとしていたことを指摘したが、清岡もまた、自らの文章を「一篇の散文詩」と捉えていたのである。詩であれば、論理性よりも芸術性が卓立するのは当然であろう。清岡の「ミロのヴィーナス」も、そのような文章として読み味わうことが求められるのである。

以上、評論文「ミロのヴィーナス」も、小林の「無常ということ」や「平家物語」と同様、「信ずるということ」を基底として書かれた、自らの真実が述べられた文章であり、かつ、自らの感動を言葉で再現・定着した、芸術性のきわめて高い文章であると言えるのである。

Ⅳ

本稿では、高等学校の現代文教科書に収載されている、小林秀雄の「無常ということ」と「平家物語」、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」を具体的に分析・検討して、これら三篇の評論文に共通する、次のような二つの特徴・性質を析出した。

- ①「信ずるということ」を基底として書かれた、自らの真実が述べられた文章である。
- ②自らの感動を言葉で再現・定着した、芸術性のきわめて高い文章である。

そして、これら二つの特徴・性質を併せ持つ評論文は、一種の散文詩として読み味わうべきではないか、ということを描いた。

以上のことをまとめて言い換えれば、評論文は、一般に、論理性の特立した「論理的文章」と考えられているが、中には、論理性が特立しているとは言い難く、むしろ、芸術性が卓立しているがゆえに、「文学的文章」に分類した方が良い評論文も存在するので、こうした評論文を国語教材として扱う際には、それなりの対応が求められる、ということである。評論文教材を授業で扱う際の主な目標・目的は、通常、論理的思考力の育成と考えられている。しかし、これらの評論文を用いてそれを図るのは無理（あるいは無意味）であって、それよりも、「文

学的文章」を扱うときと同じ目標・目的のもとに指導すべきなのである。

新しい高等学校学習指導要領の現代文Bの指導事項には、「イ 文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうこと。」²²⁾とある。その解説には、「論理的な文章や実用的な文章も含まれる」や「どのような文章を読む際にも」といった文言が見られる²³⁾が、この指導事項が小説などの「文学的文章」を主な対象としていることは明らかであろう。しかし、「無常ということ」をはじめとする、芸術性の卓立した散文詩とも言うべき評論文を扱う際には、この指導事項をそのまま目標・目的として掲げることが可能である。

たとえば、書き手の意図を的確にとらえることは、書き手の固く信ずること、すなわち、(芸術家としての)信条を正確に読み取ることである。また、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえることは、書き手が言葉で再現・定着した自らの感動(の経験)を過不足無く掴むことと言い換えられよう。とりわけ、感動(の経験)が描写(記述)された叙述を精確に辿ることが重要である。さらに、表現を味わうことは、書き手の信条や感動(の経験)が如何なる言葉遣いで言い表されているか、その言葉遣いの必然性を考えるとともに、そのように言い表された書き手の信条や感動(の経験)に共鳴・共感できるかを、読み手が自らに問うことである。

このように、本稿で扱った小林秀雄や清岡卓行の評論文は、「文学的文章」と同じ目標・目的のもとに指導することが十分可能であり、また、そうすべきなのである。教育の現場で、よりきめの細かい指導を期するためには、評論文は論理的に書かれている、という固定観念を排除しなければならない。

もちろん、小林や清岡の評論文以外に、この種の評論文が国語教科書に収載されているかどうかは、検討を要する。次の課題としたい。また、上に述べた「表現を味わうこと」は、同じく高等学校学習指導要領の現代文Bの指導事項「オ 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てること。」²⁴⁾の中の「文体や修辞などの表現上の特色をとらえ」ることに深く関連している。実は、小林や清岡の評論文には、際立った「文体や修辞などの表現上の特色」が見られるのだが、本稿では、それについてはごくわずかししか触れなかった。文体・表現の分析のしかたやその指導方法については、これも機会を改めることとする。

註

- 1) 土部(1990) 参照。
- 2) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』(教育出版、2010年) 57頁。
- 3) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』 57頁。
- 4) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』 58頁。
- 5) 西尾(1929) 参照。
- 6) 土部(1990) 参照。
- 7) 『小林秀雄全集 第一巻』(新潮社、2002年) 153頁。ただし、引用に際して、漢字は原則として現行のものに改めた(以下同様)。

- 8) 前掲『小林秀雄全集 第一巻』224頁。
- 9) 『小林秀雄全集 第十二巻』(新潮社、2001年) 103頁。
- 10) 『小林秀雄全集 第七巻』(新潮社、2001年) 53頁。
- 11) 1974年8月5日、鹿児島県霧島における夏季学生合宿教室(〈社団法人〉国民文化研究会主催)での講演の一節。この講演は、CD『小林秀雄講演【第二巻】信ずることと考えること〈講義・質疑応答〉』(新潮社、2004年)に収録されているが、本稿での引用は、高見澤潤子『生きること生かされること 兄小林秀雄の心情』(海竜社、1987年) 186～187頁に拠った。
- 12) CD『昭和の巨星 肉声の記録 ～文学者編～ 小林秀雄』(NHKサービスセンター、1996年)に拠る。
- 13) 中村明『作家の文体』(ちくま学芸文庫、1997年) 228～229頁。なお、同書には、「本書は一九七七年十二月十日、筑摩書房より刊行された作品を大幅に改めたものである。」との記載がある。
- 14) 「美を求める心」(1957年)の中の表現。『小林秀雄全集 第十一巻』(新潮社、2002年) 236頁。なお、「美を求める心」も、『精選国語総合』(東京書籍、2006年)等、高等学校の国語教科書に収載されたことがある。
- 15) 「座談／コメディ・リテレール 小林秀雄を囲んで」『小林秀雄全集 第八巻』(新潮社、2001年) 27頁。
- 16) 「座談／コメディ・リテレール 小林秀雄を囲んで」『小林秀雄全集 第八巻』(前掲) 12頁。
- 17) 「小林秀雄論」『中村光夫全集 第六巻』(筑摩書房、1972年) 210頁。なお、この「小林秀雄論」の初出は、1958年である。
- 18) 『定本 言語にとって美とはなにかⅠ』『同Ⅱ』(いずれも角川ソフィア文庫、2001年) 参照。なお、「言語にとって美とはなにか」の初出は、『試行』創刊号(試行社、1961年9月)から第14号(1965年6月)までの連載である。
- 19) 本稿では、小林秀雄の「平家物語」は、『精選現代文』(東京書籍、2006年) 128～133頁に拠った。
- 20) 本稿では、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」は、『高等学校 現代文 改訂版』(三省堂、2008年) 54～59頁に拠った。
- 21) 筑摩書房編『名指導書で読む 筑摩書房 なつかしの高校国語』(ちくま学芸文庫、2011年) 493～494頁。なお、同書収載の「『失われた両腕』について 現場のみなさんへ」は、『現代国語1 二訂版』(現国431、1979～1981年使用)の指導書『現代国語1 学習指導の研究 二訂版』(三刷、1981年)収載のものを底本にしている。
- 22) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』58頁。
- 23) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』58頁。
- 24) 前掲『高等学校学習指導要領解説 国語編』59頁。

参考・参考文献

- 坂田達紀(2007)「小林秀雄の批評の原理 ―表現の論理と非論理ないしは反論理について―」『四天王寺国際仏教大学紀要』人文社会学部第44号
- 西尾 実(1929)『国語国文の教育』古今書院
- 土部 弘(1990)「序章 論説・評論の表現特性」『論説・評論の表現(表現学大系 各論篇第27巻)』教育出版センター
- 山本伸二(2011)「第五章 指導の実際 ―高等学校編―」『国語科指導法の実践と資料』双文社出版